

はしがき

本書は「生活×リスクマネジメント×デザイン」をテーマにしている。

奈良由美子教授は、「生活者による生活リスクマネジメントは、生活上のリスクとその悪影響を、計画的で効率的な資源の獲得や分配をもって小さくしようとするもの」と定義した。そして、その目的を「生活の安全・安心を確保することによって生活のよりよさの実現に資すること」とした（奈良由美子『改訂版 生活リスクマネジメント』放送大学教育振興会、2017年、98-99頁）。

一方、山崎亮教授の言葉を借りれば、デザインとは、「課題の本質を掴み、それを美しく解決すること」である（山崎亮『コミュニティデザイン』学芸出版社、2011年、235頁）。したがって、生活上のリスクに対応するきっかけを作るのが生活リスクマネジメントのデザインだと考える。

本書をまとめるうえでヒントを得たのが、2018年1月31日と2月1日にロンドンにあるロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）で開催された Design for Safety（安全のためのデザイン）というシンポジウムである。「アート・デザイン部門」で世界大学ランキング第1位のRCAでは、インダストリアル・デザイン分野のアッシュレー・ホール（Ashley Hall）教授らが中心となって、船舶やテムズ川の安全をデザインすることに取り組んできた。

「安全のためのデザイン」については、安全な街づくり、機械の安全設計、安全標識・ピクトグラムなど、さまざまな分野がすでにあるが、RCAの取り組みなどで、より一般化していくことが期待される。この流れを受けて、本書では Design for Risk Management（RM）という考え方を着想した。

まことに拙い内容だが、本書がリスクマネジメントの学習者に参考になれば幸いである。出版にあたっては、日新火災海上保険(株)、(株)アドバンスクリエイト、大森勉さん、安生誠さん、辻廣道さんをはじめとする多くの方にお世話になった。心より感謝申し上げたい。

2018年2月

亀井克之

第2版のためのはしがき

2020年、私たちは新型コロナウイルス感染症という未曾有のリスクに直面している。まさしく生活リスクマネジメントが全世界で展開されている。どのような環境や条件（ハザード）で感染するのか。感染の拡大によってどのような損失（ロス）がもたらされるのか。感染拡大の可能性（リスク）や感染による危機（クライシス）をどのように制御（マネジメント）するのか。人類の英知を結集して、社会全体で連携してリスクコントロールすることが求められている。

初版では、高槻市の港製器工業が開発した「木の塀」（スーパーフェンス）を紹介する形で、老朽化したブロック塀の危険性について取り上げた。ところが、初版を刊行した翌月の2018年6月18日に大阪府北部地震が発生し、同じ高槻市の小学校で、ブロック塀が倒壊し、小学生の女子児童が犠牲になった。

第2版では、初版に全面的に加筆し、修正を施した。まことに拙い内容であるが、本書が読者の皆様に何らかの参考になれば幸いである。

2020年5月

亀井克之

第3版のためのはしがき

2024年は、元日に能登半島地震、翌2日に羽田空港で飛行機事故が発生するという激動の幕開けとなった。現代社会は Volatility 変動性, Uncertainty 不確実性, Complexity 複雑性, Ambiguity 曖昧性の頭文字をとって、VUCA な時代と言われる。近年、VUCA な時代そのものに、さまざまなリスクが顕在化している。こうした背景の下、生活に焦点をあてた本書が読者の皆様の参考になれば幸いである。

2024年5月

亀井克之